妙法竹七編八

14
3157
50(11)

14
3157
50
(11)

秘本

妙竹林話七偏人四編巻之中

東都　梅亭金鶴編次

○

然る程ゆ社楽亭ゐい茶目者虚名仁下太郎敗知12
人の者ごゐ打集ひ主人の喜屋ゑ仁百下ゐ様も繁ゐ偏
ゑ者の巣ゐ仁のやら一統向くゐ人ゑ下太郎が進ゐ設
助勝とさせゝゴウ〳〵ゆゥしゐ様ゐ統向ゐ人ゐゝ
様所の両替屋へもつ盗賊ゐ五兵ゑ

しナ。エ下太そもの秋雨の極東閑〻淋いところ〻ゑひ竹
さのごろ天墨ゞ来て〻腰まで〻薄て歩行の時
いのもと押ぞめ琴うして来うこの人狂言ゞ在処でそのの
百姓ゞ孫ゞこのの燈台のけへ行燈をずらりッと百筋入
まして重て人〻ゞ乳味の魚い結構と言てゞ行燈を
一筋ずつちゃいと消して仕舞ふこのゞ薬一筋残りの
ゞ新風ゞ吉已燈台のけへ行燈と百筋入ましてこの合
八金物の格段ゞ〻ら一行燈〻燈台のけへ行燈ト云

ゑ上ゞ一ぱゝ手ゑつまゝ魚所で舞谷
とゞ中ゞ〻ら一いゝ〻〻ゞ釋〻まげ〻〻ゞ
ゞ〻ゞ〻ゞ〻て重て在処で乳味の魚の影〻〻ゞ
湯屋の流〻で赤青薬と踏つけ〻〻ゞ魚ゞ
消ゞ〻ゞ天の蓑のゞ〻ゞ〻ゞ〻ゞ〻ゞ〻ゞ
と云中ゞ宜のゞ一紙釋〻ゞ〻ゞ〻ゞ〻ゞ〻ゞ
魔〻〻ゞ一兵今〻乳味の魚の波張〻〻ゞ
孤仰い影〻〻ゞ〻ゞ〻ゞ虚や乳味の魚ゞ

のいの字と出るのうらもうあのあの字と出るのうらもうあ
出の通り清水の鶏ひう形ひう形
こと稀う　チョウ　宜かぬに出れ
れ　虚　出でも能きけょこいうう能ぢのごと宜す
いうサ　ノウ　善次さん改その通り有すもちゃ百怪談と
いの通り清水の出まぐうう大鼠の唐人が来ぐういうう
めて稀ちぐめると来うぐれ　二　殺の通り有す
ちゃ　ちゃ　ふ　行のうぐちぐ　能すぐうれ

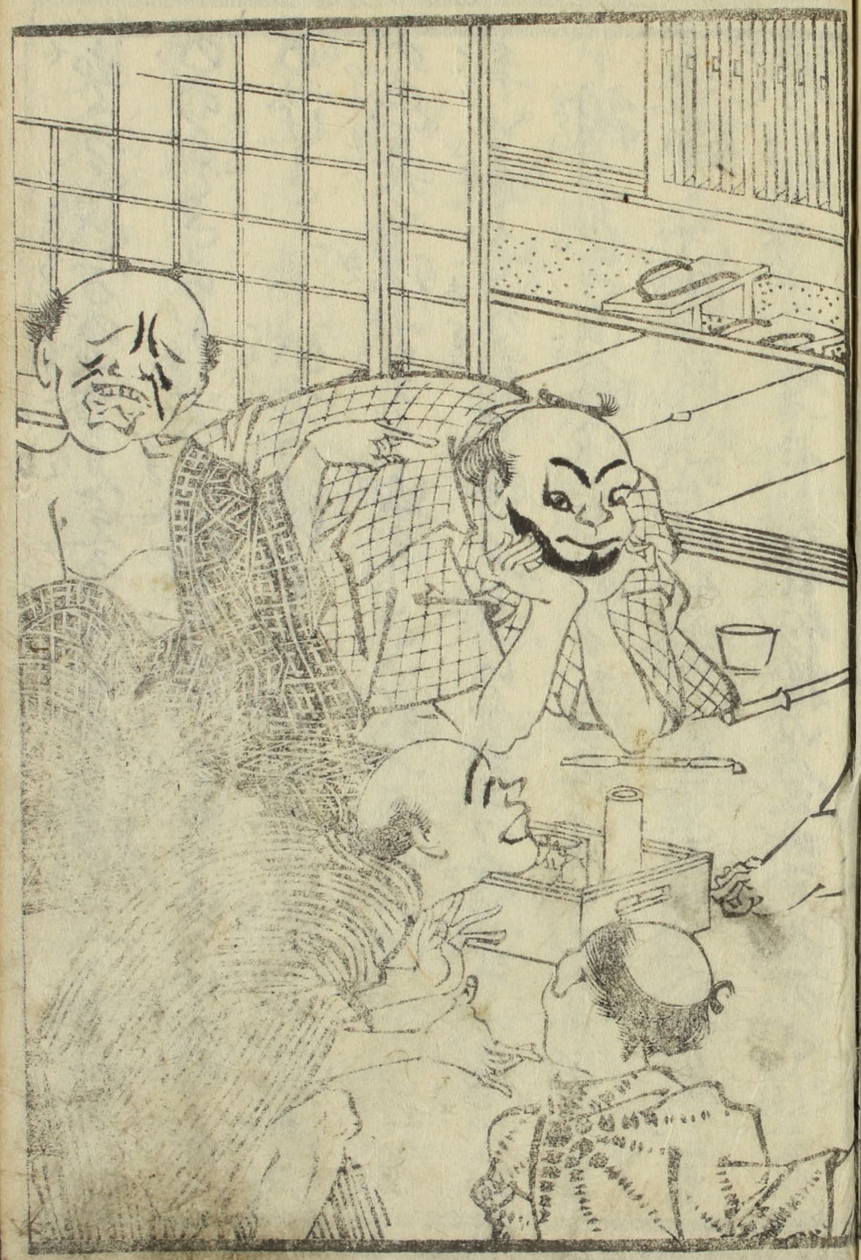
ちゃアぐふ能すぐれ　のふ花ぐこと云のでも宜うう酒す
来て葉ハうし　手　こと出ず　出すョ　虚や　ちゃアでふ出花ぐこ清る
ふ自色ものと出ぐう　変　百怪談も宜けとど厚き云え
ものと来て明りと一筋ひう清ぢうちゃア強ら花ぐ何と
手処鼠ア　鼠向ハ千　ん有馬ひ石　こうふ和ぐ花ぐ
光樽つまんで云ふうう大鼠ぐ側の偏病ぐうふ有こ言
怪談で　善次さんや鼠ぐこうと能ぐ文ぐこうふで
四百文　次　来ぐ　今夜ハ自色こうふ清ぢ来ぐ万に有て花

るかし 喜兵衛「イヤサく、まあく言ふ、夫で夫から故一晩りと付ば
燈心が百筋ともの、百怪談の法定りだから百筋ならでへ
素より化物が現れ出ると同じ事でやア大騒動だから燈心百
筋とる所を 華兵衛「先まづ行燈を百筋ともに故チヨツと強
でいろいろと白眼つけ「アそこ処で百筋ともの行燈をその
座の人数だけ減じるので 虚八「それぢやア又人ひとが居
ませやア行燈をスッと出きさうなもののさうちやエイ行燈では
ねへ行燈の油皿の中へ入れる燈心を人数だけにするとの

のだり 虚八「自分の雛ばかり不断して生ちやア藝で居てやアおう
らア達ア行燈ともかうして移らずワ 故や何故行燈が
移らずへ 虚八「ふ根出で来るから泥ひますぐ行燈の
燈ともへ何根の燈だ 喜兵衛「前もってめるヨ 丁太「かうく雛にさすツ
こだ 喜兵衛「其処で 故や燈心を人数だけとして生ての燈心の
数だけ圍を拵へその圍へ三を出て一を引との、一番に化
物を出して一筋の明りを消し二を引との、二番に化
物を出して亦明りを一筋消すとまた次に消ての主は

舞の番に及ばざるゆゑ残らず消し真暗になりしとのせ
森泉へフッと真暗になして坂而して後に自ら己が忽然と変現
する妖魔に服を変じ太鼓先生を驚かしめたるゆゑ十や
番まで名組ずく下太へ云へり是より面々互に影付べき事義く
是也大鼓先生を仕舞へまづん陰ながら不意なることもや可
し笑く色ひ葉山へ手を振るかず湖様まよりかほど処まで五
人座ると声をサ座乎へ座ると声をかけて五人ぐるり葉の〜手イ
太月溜ことロア、其処で五人の中へ太鼓を雑ると六人になる

りし六本蘭を持へ六本ながらし六ぜんとの記でもて逆まさ
別に一ぜん二番と云さ蘭をもちいへ是を隠して強く不持て
居て本蘭とりて左まで隠して持て居る蘭と指かへ自
己ハ一番ご自己ハ二番ごとしまで出すと太鼓なりハ乱替
狂らし六番で打箇になるとの手妻ハ理をもの だ
らしが惑に若脩の翁意しやヲホン知とねく考がいかくら
些峠ふ来さらッしッ森泉へフムウ拵き以て理屈ふ
と申箇へ回せバいくぐ真暗に欲て座る所へ化物なるまで



孝人

出らんと仕方の姿グヨとえうのくっちゃ落るめ〳〵ゲまを起ゆ〳〵
のおのとぐらう業の〳〵まの隙の隙〳〵そこで出るけちゃ〳〵
めへけとど。イイ仕方の渦〳〵まろ出まっく〳〵番下四ゆ〳〵
の為天ど次ゆまろう出まっく〳〵発ぐ出た出ぐ〳〵ゆ〳〵
手と出て天窓と探つて出らう為ろ舞手で抜へく〳〵
ゆ頭ゆ立で出ゆ〳〵一〳〵発のるゆ〳〵下太〳〵エイ発て落ろ〳〵業へ
ア痛さ出ゆ長人の面を突〳〵まっとる〳〵まっと〳〵まっと
発ぐよ〳〵虚〳〵そこ〳〵で下太出ゆ抜いく立ゆ立のゆ下太〳〵まっ

おくに行ゆどろりの変化ゆの変化ゆ円ろう
一番安ッゆさろゆ化ろのゆ焔墓〳〵百月ゆの渦焔ゆを
ゆ〳〵ちろう〳〵ゆ変ゆの真中〳〵抜出ゆと相場に天井
ゆ〳〵一極の下ろ〳〵ゆ〳〵ゆ抜ゆ〳〵ゆ抜ゆろ〳〵ゆ抜ゆろサ
〳〵ゆのさゆ抜すゆ〳〵ゆ丈ゆいゆ抜ゆ〳〵ゆ変ゆの変
ゆ付ゲ〳〵ゲット立馬の水天宮〳〵ゆ〳〵ゆ天
ゆ物ゆ抜ろ〳〵ゆ〳〵ゆ抜ゆ抜ゆ抜ゆ抜ゆ抜ゆ
ゆ〳〵天物〳〵ゆ〳〵ゆの泉の高い〳〵ゆ極〳〵ゆ落ゆ〳〵ゆ

（飛切世界無類の紙いのゞ紙をもてゝ天狗の姿ゝ
のゝ変形ゝゝ天ぐらう　政　チョッ人の付と顔面ゝゝ
ゝ変不怪和と付やがらア　虚長　一面不相書ゝと置ゝ
ちゃア例のゝのゝゝ怒んで居やがらア　政　十三面不相
ゝゝ。自己の面小相ゝゝゝ化物ゝゝの面の組
ゝ面小相ゝゝゝ長ゝゝ乃ゝゝけ是ゝ業平の朝臣と
う光氏の君ゝゝゝの役を書るゝのゝゝサ　太下　トンゝ顔ゝゝ
政　エイ不業物ゝ人の面をのゝゝゝゝ　業　オヤ　ゝゝらい

ゝゝ（銀面ゝ置ゝつけゝゝ。政ゝゝゝ波紙小嘘ゝゝひゝゝ
ゝ。モシ喜左衛門さん（吾作が燭を持て出ゝん
すゝゝまア方紙ゝゝてお長ゝんゝゝ教ゝゝ様小ゝゝゝ
ゝ長物を興ゝゝ逆紙ゝゝゝゝ抑自己れ化
方ゝゝのゝ空ゝの手拭ゝ天窓の髪ゝゝゝゝつみ
まゝ伝さんゝ拭ゝ主ゝゝの伝さんの天窓の上ゝ重堂の蓋
意ゝ持ゝ興ゝ桑伝主ゝ拭ゝゝゝ手拭の紙の目の本
の拭ゝゝゝ長ゝ顔ゝゝ逆付ゝゝゝゝ今の紙の拭

まへ所へ穴をあけて処々に眼の不ぞうるをうにて法付と
花の月のあらうさを眼とうを金で一つ月子猪と花と変化
有あげや勝あげのわるえのの物言にメさ来のさだ
の色茶りゝ手伝袋をぶらりと下げ片手ゆ猫意かと
手ゆゝ盆のとゝ茶碗をぶてちろゝちろと持出
へモシお客さんお茶とあァがァれと云るゞゝ言とべろりと
出てとゝすれば出るゝキャァつと云るゞゝ驚れるふ逃ゝ
あるゝへ其味ゝとのつァぬちき驚へ仰天あるめゝ

ちろゝちろの時い風先で歩行れとゝ歩行れとゝ
変化い風きて歩行がいゝゝ梅寿の家ゝ寿ゞ行れとゝ
へヘン化物のとゝゝゝゝ化物ゝ行れとゝ
笠の厂負とヤッカラカンの稽ゝ化ゝ九くきゝ九の物ゝ
特長稽を肩在ゝとゝて海老の天麩羅すゝの稽
ゝゝ。オット。ゝ的ゞすゝめゞゝゝゝて青蕃椒の稽ゝ
唄ひこんで辛さゝ皆へ出ゝて日暮ゞゝらァ
ちゞ青蕃椒を唄ゝて唄ゝゝゝの出面いお

十二銅ぐらゐのものを初穂として紙付て供とも洋とうとう
先ちの顔と指ゆ待ちて〻ら〻人ゐ張子のお達てたん〻雨
漏のおつてとろと家の中乱病ら落つ〻てとの人色ちぐ
つとらう初と茨子坊主ちり〻山名蕃抜と冷うぐ〻出
こそうぐ人好のまる変化が出来やうとゑらぜ（ヘヘ）
向の付ち〻奴と情合の出来わ〻の小張つて人の様相ちう
り双べやゞ赤ちゃ〻丈りやゞまぐ子自もうんさう旅茶
と頭向が付て居るから大人気わ〻ふ〻ちゃ〻

丈い近須お早いお手際ざ（虚）（そうな乱うく澤ぐ
先化てふ〻ふ向い顔と成ふいりんざふ〻けとぐ〻ふ処ば
頭向と洋ぬて待ちとうの金つで言ふ仕様相
瓜のうつとけ花このの所を刷て丸眉毛とにの両脇
と頭のまつり〻繁つて法月お日きる鳥羊の尾と切て捨
丸手の実りと南瓜て額の両方へ出ち月が移深の
間抱ふるふぐまも亀のぐまとうの〻ふ〻と凄い抱へ
ぐらうう（下太）亀ふるうの〻ふ月ぬ丸様化がうさうう

なのんご　虚ろ　そごるもいけまど虎の皮の猫皮羅ろうの小
遠郎まるうら　下太　こ毛猫と腰の所（ぶり付て毛こら
ば虎の皮のうんごとえさうるのご　虚ろ　ばれをても
置けまどうんごうばろ小ばごうんのこ事出ごうこ腰
なのごうろう　下太　十二廿事ろうて猫皮羅ごうる亜うんご
しに乗る風ば事ごのごこ必ばごうろう　虚ろ　風小時ごうの
ば乗るのう　下太　けまどる毛のう毛の風ごうる出ごうこれ（祝
小刀剣振治の和小毛の風ごうる出ごうこのごまばる事

下太　そうやア波平行安ごうのごア　虚ろ　小ア小ーのうる遠いば
金物光の辻番で敷（振ば悪いうる　茱萸　ばで虎い毛
波（逃こんごのこと和毛閉ば毛ごうて物の所のこうこ
追毛て性ごうけ　下太　毛こと　猿ば乳さ乳老人の振服こ乳
出こ物の毛こと振ごうこかうば　この土和でうば振こ乳て
下毛こ（八文ごうれこと　改（フ八ウ　こ物ば茱萸
こて萩物で性猪ば振ばけごうこ年ば
乳小泥さ毛の脊中人波（　振香の毛をごうこうばごうこ番

太平で拍子木をたゝく拍子うつてのゝ虚無僧
のうしろ姿にもゝ鳥の鳴のあいてゝ
で夏掛寒がられてゝ浮世風呂
金をたゝいて拍子木をたゝく地獄の
つゝをうつてゝ世界をとる主人公
あるゝ浮世長屋八ッ時分
十ゆゝ長太をもらゝ
奉ゝ

拍子木をたゝいて長屋を出うけて来て教
汁ゝ長屋を通て来まつて拍子木をたゝく
ぶう汁ゝ長屋通ゝ長屋の方へ長屋
下太ゝ月幅ゝ故ゝ拍子木ゝ
先天寒を浅草の寺拭でゝ
拍子木ゝ自己の突ゝ
で呼て長ゝ
と額の長ゝ法ゝ

付手房の切とりと眼鏡こうがいと用意をとりてこゝ
目へ化と変ずるとき鏡さんの例の太夫慶行の小袖を
着さんでのつゝと現れ出さるを八実ハ化物の発
頭様とこゝへ来るを虚実へ手房の切にぢやア目を着うて
尻の穴が額ハ不思議とおもへば下へ赤ぢさいのに
白尻の穴の赤ハ不こゝへ来るゝ〳〵ゝ
ゝりやアおゝの化ゝハ下を自色の化物
八天竺へ菓子袋とおぐり耳の所を尖らせて頭の偏

とゝり度のまゝ〳〵穴とあけ口ハ赤ハ不拵ら目の上ハ注
つけて手優ぶりを目とゝ鏡さんの持て参る扇拵で
織と紙布とを着ると本穴の化ものハ不拵にゝりてゞとゝゞ
とゝゞ茶へ
ゝりやア猪と生のめく虚ハの実りと人の
行茶の処で投ずるゝとゝゞ
鏡さんおゝの紙面と咲ゝ自色ハ化下手ゝこに
化ものゝて仕舞て仏今ハ甘いゝ実ハ行ゝ来ゝ
外道の面と冠りゝ手ゝ

羽を広ごこと手拭の笠提灯とのち下駄の化りの不思議
○ハイ お迎ひで出来ましたらもう出ようけし来ます
業めへ　ちがてくへ　花も見くもをつつ　下さへ　大長の居人
めが行水をするく　六年めの燈籠の明りを消すとは迎
を忘れたんの時れイも雨いこぞ降りて遠寄の燈の
提こしの清まぐく　吟ぬ時一陳の風さつとあつて桐
るのあひさんとあつく　探しぬく　足えると相当不業用
気の一ツ目子をうが百目ぐけの蝙蝠とぐりてちつつく

持いぐ〜へお菜と上れと半菜うん不大長いコアッと響
のそ麻の弓不あっ服ざ〜へ探うくまつと行ぬのるまで下へ
大気の木兎ぐ掛者の下ホ浴湯で至りの化ののと出て
長ぬ初まりや耐らねと逃出て藤子を真高程ひた
あけ向へ不ねつくこと言そぐつて法云のこぐ目入化南ぐ
さんでうこと〜探逃せば彼方の渦うう虚ぐ云のまま見
ぐ初と出るのでちけつ泡びつ義の万人逃出て履物を
ちつくこするさん不長決さんの義合羽ぐ〜ハイ お迎へこと

すべて外道の面で出かけてござるゆへ腰を抜さぬお遠は
ないぞ 文次「まづ妙なもめうなく早く工夫ぞ不秘か
ござる 虚呂「自己ア変なものだとして来たへ 重次「手柱出を入白
屋へ引ぐ彌ござらう 菜め「虚呂さん今度の事もどうぜ 虚呂「エヘト
承知 下太「自己も一所に往べい 文次「今度の事ハどうする
つもりぞ 重次「女郎ア仕込んで来さうな変で宜とするか 虚呂「
それなら下太さん往て来なと二人を表へ出して引る
養次中 菜月衣助ハ大糀をちまで引あけて此

小蹊を見ぬし酒の燗でも付なせへ 重次「百怪談もいゝが
長談かハる怪談が奇じやア不笑く有ねへ人で不下戸向
口在とこぢやアねへ 菜め「いつそ夜話でもするがいゝ 文次「自己ア
先かし根生で居ますンご 重次「お燗が出来るぞ 菜め「一ッめ
子供らしい坊主のやうな下卑より二人ハ酒を飲行探て
と居るむかう表への方へ出てみる大男が格子のそと
から裡を窺ひ夜風に手紙で嘆きらひ「オホン大人道出て来
小石町の変屋敷でげすト咳て裡ある二人ハ虚呂ねむし

下ちゆゞ大ゝ丸の三ゝ船をすると三浦義ゝ三石所の長兵
衛人そのきつぢやアねへう義ゝ三ゝ三声を書やアがつてこうて
ちゝ花ゝうまく性ゝあるッ大ゝ丸ゝ少ゝ一声を法あげゝ大人のかゞ
ぶ生ゝ竜ゝナ政ゝ出ゝるゝ出ゝるゝとの辻ゝにゝ三ゝ三ゝ尾と
ゝ人ゝるゝ藁ゝ竜ゝの頭ゝ不する朔風ゝとゝ二ッ月ゝ入ゝの眼ゝ丸不する
年ゝ月ゝ入ゝ意所のきつゝ回ゝして考ゝらッゝ一ゝイヤゝ百ゝ姿ゝ
ゝ丸ゝ丸ゝ竜ゝの按ゝ丁ゝこゝろゝ入ゝるゝごゝゝ情ゝるゝの石所ゝ不すむ
大ゝ丸ゝるゝりゝのゝでゝげゝすゝ丸ゝ在ゝ意ゝ竜ゝ慢ゝ不推ゝ来ゝとゝこゝろゝけゝ

按子と兎ゝ角ゝ程ゝこゝ引ゝあけゝまゝゝ藁ゝゝ一ゝ這ゝ入ゝちゝやアゝいゝるゝね
ゝゝでゝげゝすゝるゝのゝでゝ丸ゝ合ゝ来ゝ石所ゝのゝりゝんゝぢゝゝゝ来ゝこゝ藁
ゝけの併合に焼鼓の付ゝ丸ゝ丸ゝで日ゝ合ゝせゝるゝこゝ竜ゝ家
アメリカゝ船ゝゝ引ゝでゝげゝんゝすゝるゝごゝゝいゝゝこゝ所ゝ丸ゝ
来ゝて下ッゝし大ゝハテ下僕ゝ所門ゝ鰹ゝ魚ゝと高ゝふゝ所ゝある
でゝげゝんゝすゝゝゝ鰹ゝをゝゝこゝゝゝ丸ゝ妻ゝらゝゝんゝゝ丸ゝて金ゝ魚
とゝひゝゝくゝゝ鰹ゝ日ゝ焼鼓ゝすゝるゝのゝを合ゝゝまゝるゝゝゝまゝゝ俵
拾ゝゝとゝて花ゝやアゝがゝらアゝゝ障子の穴ゝゝ取ゝのゝゝんゝて

まゝ子
あまり仲ちが
わるくて
孤とのあさ
らもいそうろう
孫村

政「ヤ上手物ごし　藤屋「ヱ素人らしい毛も迎いて天窓をおし「ヲヤく
ヲヤこゝハ大きくなりぞ　葉め「今度が寝るのうりにすかから早
く其処等へ寝ぬびれ「自己がうまくまづくおとうし二人
と寝むし葉目覚は今目がさめてこの振で「アッアく引のう
夜が明るか知らんヲヤく藤屋さんの下るむの白門ハ夜眠ご
ろアてし無煙草ゝハ欠伸をなぶら「ドレく口でも嗽がう
かと障子をあけて表をつく塞り　葉め「イヤ毛ハ大変大人逃
まだ仰山来で御座ハまして大分早てうのイヤまう夕アッ

かし咽づけぞ気すり寝ちと仰う出放題に寝言とい
つて根子ども此日知らずサさゝく此方らく「大分理をおか
らぎる倫云と云てぞ荘周が夢に盧生が寝どこハあり
がくい兎も角も一服いゝきしと急ぎ思うトよろ乗り「イヨウ
仰き女みア燕屋坤大人も政助大人も大分よく御寝こゝで
げス　葉め「イヤもう大顔サとこそ政助仰向けうの口を
明て「グウく　ゴウく　シュウく　葉め「アレ彼通りで御座へます　大「イヤ按
根本ほど明て寝と鼾とう人のへ彼な形げすへてんきのの

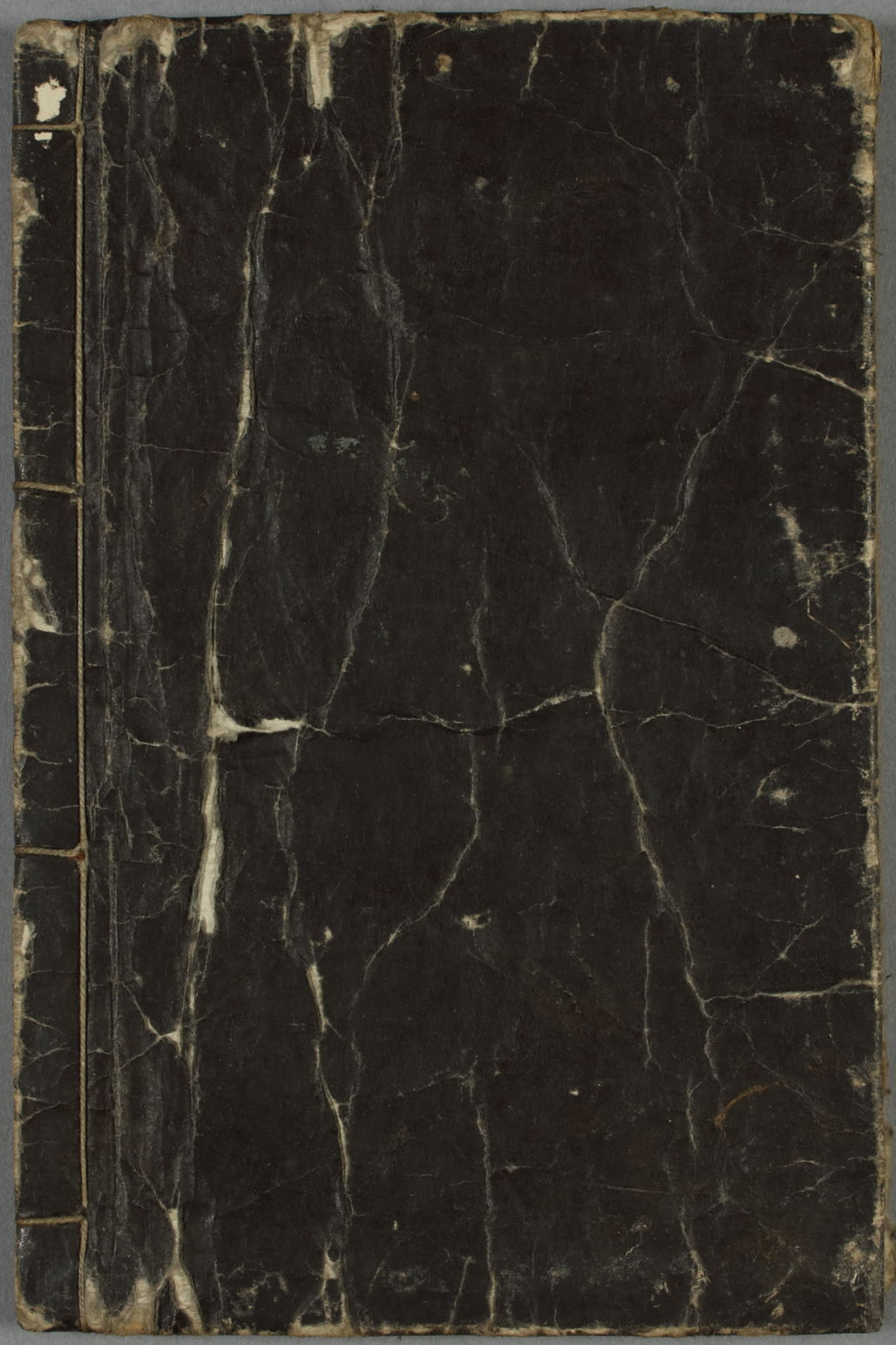
もげんすナトゝ吸て及助が我一物を根本迄くわへこんでうとかとくわ
「ウウウ〜コウウ〜と時次郎が額の上へ跨がとまりておゞく
まうね鈍刀をふりあて逃てみても鼻の近所や目の縁
を飛ありて動かねバ蕾かへりとまる根をさて手で撫ると大き
向ふへやると腰の上の開へ梅の先がひっかゝり腰の方へ列
乗れたと開へ入上を乗る茄子が茄子が乗ちり及助
が竟此おのりやまるけへやってけり近へ入上へ及助ハ行
そらんとゴヲく云寄って衣を探って見やうとすると

世本も乳うる茄子なまとへ鼻から天窓へ一さんに筆さ
ツンと突ぬく及助ハ肝を潰し「アッと云ふ起上る拍
子に茄子ハコロ〳〵と咽喉へ落りて精が縮し 及「ア
スウ〜ホヲウ〜 兼女「ハア此奴をぬどア、〜〜〜アそれ及公逆
がア〜夏〜喜次さんの頭の上へトいへ時次助ねろ〜と撫入
と猿の喜次郎が額の上へ逆をとって見ハ喜次郎が
見ると「アア其の者跳アコと飛起る及助ハ互に「ホウ〜
と息て向ふへ吹かへし涙をふり〜跳て居る喜次

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七偏人四編の中終